

柔道の未来選択の位相

— ヨーロッパ・フランス柔道から読み解く —

溝口 紀子 静岡文化芸術大学教授

みなさんこんにちは。今日の東京は今シーズン一番の寒さということで、私が寒気をつれてきてしまったような感じですが、静岡は比較的暖かい地域ですから、寒さを嘯みしめながらこちらに参りました。本日はお招きいただきましてありがとうございます。

とりわけ私と一橋大学とは 20 年前にさかのぼります。ここから見える道場は、当時はプレハブだったと思いますが、この道場で一橋の大学の男子学生と寝技で鍛えられた思い出があります。それこそ、今日くらいの寒さの中で、雪も降っていた中、もう体から湯気がでるくらいに激しい稽古をしました。男子学生に負けて悔しいなと思いながら国立の駅を帰っていったことが思い出にあります。みなさん一橋の柔道部が強いことを知っていますか？寝技の独特な文化を持っているんです。後ほど話していきますけど、身近な独自性のある文化がこの大学のすぐそこにあって、とはいえ同じ一橋のみなさん知らなかったりする側面もあるので、ちょっと今日は違った面でいろんな柔道を見て行ってほしいなと思います。とりわけ私の専門の柔道というところから、ヨーロッパ、フランス。とりわけ私はフランスのナショナルチームのコーチをしておりましたので、フランスっていうところから、柔道の思想的なところを見ていきたいなと思っています。それから未来選択という視点でも発展的に考察していきたいとおもいます。ちなみに締め技は得意で 2 秒で締め落とすことができますが、講演では思考の格闘技はゆっくり時間をかけてじっくり着地点に絞め落としていきたいと思っています。(笑)

また今日は、思想の異種格闘技戦だと思います。それでは発表のほうを進めさせていただきます。

(座らせていただきます)

これまでスポーツと音楽は全然違う世界と思っていたのですが小岩先生に相談すると、とてもよく構造が似ていることに気づきました。こういう見方も有るんじゃないですかといった発見もありました。

さて、柔道思想ですけども、今日の論点は、欧州の社会で日本の文化としての柔道がどのように思想的に影響を及ぼしたのかっていうところを中心にみていきたいと思っています。欧州と言ってもフランスが中心になってしまいますけれどもその辺にクローズアップしていきたいと思っています。

そしてその現代と結びつくときに外せないことは、とりわけ多文化社会におけるテロです。多文化社会のフランスという文脈のなかで、どういう風に国際化する柔道の現状を見ていくかだと思います。そこに現在の思想的なもの、社会的な意味が存在し、柔道が与えてきた影響も見えるのではないかと。そういった論点から発表していきたいと思っています。

私は研究者の中では、ロジックは白帯程度のレベルだとおもいます。先日、学位をいただきました。ようやくお墨付きを頂いたんですけども、とはいえ研究者として私は未熟です。それでは私の研究者としての強みは何かと言ったら圧倒的なリアリティを持った研究者であることだと思います。私はある意味、思考の材料はいっぱいもっているんですけど、伏線という意味でのディシプリン、ロジックは、まだまだ未熟です。本日は他の分野の研究者からご意見をいただくことで全く違う見方から予想できると思うので、非常に楽しみにしております。

「圧倒的なリアリティ」をどんどん出してきます

ので、その中で皆さん様々な発見をしてほしいと思います。なるべく映像とか写真とか一杯、用意しましたので見てください。

まずフランスのスポーツ文化、柔道における位置ですが、この写真は私の教え子です。今現在もフランス代表に入っています。ドイツにいたんですが、彼女がヨーロッパ選手権で優勝した次の日、フランスのシラク大統領から祝電が送られてきました。こういう習慣が日本のスポーツにあります。フランスでは柔道の選手だけじゃなくて他の選手にも賞賛する文化があります。このように欧州ではスポーツの社会的地位が高いです。

ではなぜ、スポーツの社会的地位や価値が諸外国では高いのか？なぜ日本とこんなにも違うのかという点で考えてみます。

フランスの柔道の表記は **le Judo** ですね。つまり漢字の日本の柔道と英語表記の **JUDO** です。その表記とも違う。つまり **Le Judo** とはフランスの文化と柔道が接触して変容したもの。文化触変が起きている中での柔道としてとらえないと理解しがたいのです。私が文化運搬者として「これが日本の正しい柔道だ」、と言ってご当地の指導にあたりと歓迎される一方で反発もあるんです。私自身も、日本の本流を教えてくれと言われた場合、逆に本流の柔道を自分自身もどうやって伝えたいんだろうか。と。なぜならフランスの柔道はすでに私たちの日本人の柔道ではない。言葉の使い方もちがうし感覚も違う。それが現場で気が付いた自分なりの文化相対主義であり、文化触変です。

柔道と **JUDO** の違いっていうのは文化相対主義という潮流の中で、それぞれの国に合った文化にのなかで独自の **JUDO** に変わっていくことです。現代の日本の柔道家は若い世代はだいぶ理解できていると思いますけども、私より上の世代、もしくは私の世代の柔道家は文化相対主義という考え方自体があまり理解されていないですね。たしか年末に正しい柔道を教えるというテレビ番組がありました。これは柔道じゃないと一蹴する内容だったのですが、正しい柔道は、日本人しかで

きず外国人ではできないのでしょうか。番組では正しい柔道押し付けていることに気が付けないまま進行していききました。このように日本人柔道家が無意識のうちに今の国際柔道のなかで孤立しているということがあります。

実は私も最初は柔道が外国の文化と交わってハイブリットになっていく中で変わって来たんだとなんとなく思っていたんですけども、フランスで指導することで実はそうじゃなかったと気が付いたのです。それはそもそも柔道ではなくて柔術柔道という文化だったんだということが前提にあります。

例えば、フランス柔道連盟の正式名称は、フランス柔術柔道連盟なんです。柔道連盟じゃなくて柔術と一緒になんです。日本は全日本柔道連盟ですね。最近はブラジリアン柔術とか流行りですが、言い換えれば本家の日本の古流柔術です。とはいえ日本では古流柔術は人気がなくガラパゴス化しています。一方海外では昔からの古流柔術はしっかり残っています。フランス連盟も柔術柔道連盟と明言しているのも柔術の成り立ちを大事にしているからです。そういう流れの中で柔術が再構成されて、新しい海外文化として再解釈され、新平衡として柔道が出現してきた。もちろん部分的な解体もあったと思います。とりわけ柔術がブラジルでブラジリアン柔術になったように。その一方で、本家の日本では柔術が抹殺されていく傾向にあるという現象も面白いです。逆に古流柔術が抹殺されなかったのがフランスでありブラジルだった。そういうのがすごく面白いなと思いました。自分が指導者として現場の中でこういったロジックをはめ込んでいくと、実際にその現場で起きていることを面白く解釈することが出来ました。そこで柔術も柔道も同じ解釈ということから博士論文の出発点になります。柔道史というのは、正史である講道館柔道と、大日本武徳会の歴史から成り立っています。「柔道」という言説は 1902 年くらいのときはまだ一般的ではなかったんですね。大日本武徳会柔術形選定委員会の集合写真の真ん

中に嘉納治五郎がいますけど、当時は講道館も柔術流派の1つとしてみなされていたわけです。これは私の歴史感ですけども、戦後、講道館が正史になってしまっていて、秘史のあった武徳会（大日本武徳会）の歴史、古流柔術の歴史、女子柔道の歴史、警視庁、帝大、旧制高校の柔道、つまり一橋の柔道ですね、これらの柔道史が埋もれてしまった。さらに正史としての柔道がクローズアップされすぎてしまい、日本では柔道のダイナミズムが見れなくなった。とはいえフランスでは一連のダイナミズムが見えたのです。そこで自分なりの歴史感で歴史社会学の手法で調べたいと思いました。

講道館柔道史が柔道正史と位置付けられていて、講道館以外の柔道、すなわち大日本武道会とか、高専柔道とかの柔術流派の歴史は明示的に論じられていなかった。音楽もそういうところあると思うんです。主流派とか異端とか。その時代で異端だった秘史は、実は当時は主流だったりするところは、構造的にもしかしたら似ているのかも知れないですね。

スポーツの言説では、サッカーが一番わかりやすいです。大学の授業でも最初にやります。サッカーは主に足を使う。その一方で主に手を使うのがラグビー。つまりラグビーフットボール。サッカーの名称は **association football** アソシエーションフットボール。そしてその **association** が短くなって現在の **soccer** っってなっているわけです。ヨーロッパ留学されたことがある方はご周知と思いますが、欧州では、フットボール、もしくはフットと言われています。サッカーというアメリカかぶれみたいな感じで思われてしまいます。それくらいヨーロッパでは一般的。でも日本ではサッカーと言いますね。その辺が面白い。実際国際サッカー連盟を **Federation de Football Association** (フランス語) となっています。とはいえ日本では国際フットボール連盟とは訳さず、国際サッカー連盟と邦訳されるのが一般的です。テニスもそうですね。テニスは最初、貴族のスポ

ーツとして修道院の中庭でやっていたのが、芝(ローン)でやるようになった。石畳から芝になっていく、しかしこれが近代になるとクレイ、さらに最近ではスカッシュとかも出現してきました。現在ではすっかりローンがとれてしまって、国際テニス連盟となっています。このように言葉は社会的背景をかなり映し出しているのです。そこで柔術柔道に話を戻しますが、日本の辞書とか百科事典で「柔道」を引くと、本来は柔術なんだけどやっぱり嘉納治五郎が柔道を作ったという解釈がほとんどでした。つまり嘉納治五郎が創造した講道館柔道が柔道としての定義となっています。私自身も以前は講道館柔道が柔道正史のすべてであると思っていました。しかし資料渉猟してみると柔道は嘉納治五郎によって作られたという文脈で正史がつくられていったというのがわかりました。

では海外ではどうやってみられているかを見てみると、ほとんどその柔術=柔道という図式です。興味のある方は社会学の井上先生の「武道の誕生」という本をみていただくと、言説の発現については詳しく分析されています。実際には嘉納治五郎でさえ自身の論文でも柔術という言葉を使用しています。嘉納治五郎の門下生であったラフカディオ・オハーンも、「柔術」について「東の国から」というエッセイで書いています。嘉納に教えてもらったのは講道館柔道であるはずだけれども、著書では「柔術」として紹介されています。他の著者にも嘉納氏の柔術学校という表現です。当時は日本人でも柔術とか柔道とか区別はつかない。新登場した柔道よりも伝統的な柔術のほうが一般的であったといえます。

では日本では「術から道へ」いつかわったのか。その中心となったのが先ほどの武徳会です。武道の振興団体でした。今でいう日本体育協会の武道版になるんですかね、公益団体であった武徳会が中心となって柔術から柔道へ名称変更をしたのです。公になったのが1919年。1920年から文科省も術から道へ変えなさいとお達しがあったのです。弓術から弓道。柔術から柔道。剣術から剣道。も

ちろん柔道部も柔術部も。一斉に名称変更がされてきたと言えます。

そんななかで当時、外国人に柔道を教えていた人たちは外交官や芸術家や音楽家などの文化人なんです。パスポートを入手するのも困難な上、お金もない。例えば画家の藤田冬嗣とかは、貧乏人で絵具が買えなくて柔道を教えることでお金を稼いでいた。柔道のコミュニティに入ることでフランスの社会に入る。これは外国人がその国の社会に交わる際のヒントになるんじゃないかなと思います。我々がよく言うのは、柔道衣は名刺替わり。海外にいくと「黒帯を持っています」というと尊敬の眼差しを向けられます。柔道の黒帯、日本では比較的簡単に習得できますが海外では黒帯とるのが大変です。私もびっくりしたんですけど、フランスの INSEP というナショナルトレーニングセンターにいくと、最初に大きく嘉納治五郎と同じくらい飾られているのが、川石酒造之助というかたです。日本では全く知られていませんがフランスでは柔道と同じ位置づけでフランスの柔道の礎を気付いた柔道家です。またイギリスでは小泉軍事が有名です。この方もイギリス柔道界ではすごく有名な方。日本人は誰も一般的に知らない。この方はイギリスの柔道の父といわれています。谷幸雄も柔術家で、よく海外の資料や文献では出てきます。どちらかというといギリス、フランス、アメリカでデモンストレーションを中心にやっていた柔道家です。

それではなぜ、柔術が当時のヨーロッパ社会で受け入れられたのか？

フランスでは 1900 年から当初から、30 年くらい、戦前にかけて、特に 1800 年後半から 1990 年前半ですね。非常に犯罪率が多い。そういった意味で護身術というのが非常に貴重に思われていました。こういった背景もあって、パリの治安の悪化のなかで護身術が求められました。また当時のジャポニズムの流行も後押しして、ただの日本文化ではなく護身術ということ非常に人気を博しました。パフォーマンスというところでわか

りやすいパフォーマンスであるし、日本人の身体技法というか、所作もそうですけども、武士道的なパフォーマンスが入ったりするという意味では、護身術というだけではなくて、身体文化としてのジャポニズムとして受け入れられました。とりわけ女性はですねパリの治安が悪いですから、女性のための護身術として非常に上流階級のマダムたちに柔術が受け入れられました。どれだけ浸透していたかということの 1 つの証左シャンソンが挙げられます。瞠目するのは柔術の歌まであったのです。まさにフランス版の「柔」が、日本よりも早く出現していたということです。歌詞には、(le vrai jujutsu) 本当の柔術か？とあるんですけどもちょっと聞いてみてください。すごくおもしろいです。～映像の視聴～

どうですか？あとぜひ感想を聞かせてください。これ 1902 年くらいですが、のちに日本の柔を歌った美空ひばりもびっくりだと思います。このような柔文化があったこと自体が驚きだと思うんですけども、さらに驚くことは、後半の歌詞はすごくエロティックな内容になっていたんです。拙著の『性と柔』にも書きましたが柔道はなぜ有閑層に取り入れられたのかという点で、エロティックな文化だからこそなんですね。例えば、柔道着の下は何も身につけないで裸ですよ。そのうえ絞めたり、サディスティックなことが許された空間が柔術には存在するという内容が謳われているんです。柔術がそこまでパリの日常の有閑層に文化として浸透していたというのが、このシャンソンから見てとれます。

日本では女子柔道の試合を禁止されました。また、もっと分かりやすい記号で言うと、黒帯ですよ。黒帯は日本ですと二種類存在します、黒帯と白線黒帯があります。白線黒帯は女子がつけます。一方黒帯は男性がつけるのです。講道館柔道の創設者嘉納治五郎は女性に試合をさせたくなかった。なぜなら、男性と女性は組ませたくなかったのです。女性を保護する意味で白線黒帯を女性につけることで差別化した。とはいえこれは差別

じゃない区別だという意見もあります。区別か差別か実際はわかんないですけども、とにかく女性には試合禁止させる意図があったようです。試合を奨励することで競争主義になってしまうなかで、やはり無理をしない、遊びの中の柔道っていうのも、女子の柔道にも見出してほしい。そういった保護と遊びの二面性をもってたんじゃないかと考えられます。日本では女性は試合が禁止されていましたが、実はアメリカとかフランスでは、女子は試合をすることを嘉納は黙認していたし、武徳会では女性が昇段するのも応援していたとも言われています。一方で、フランスの川石氏は、パリでの護身術の流行に目をつけ、どんどん女性は試合をやりなさいということを進めていきます。欧州では参政権運動、フェミニズムが広がっており、柔術にも影響を及ぼしていきます。

例えばイギリスでは女性参政権運動の中心となったガールド夫人は前述の小泉軍事の教え子です。このガールド夫人がデモ中にロンドン警視を柔術で投げ飛ばしてしまうのです。これが、参政権運動の象徴としてパンチ紙に掲載されたのです。まさに小さい小よく大を制す。力のないものが大きなものを倒す。それは女性参政権もそうですよね。欧州ではたんなる護身術ではなくて、柔術というのはジェンダー、女性解放の装置という形で受け入れられた歴史があります。まさかフェミニズム、女性の思想にまで柔術が入り込んでいたことに驚きを隠せません。先ほどのフランス柔道の父親と言われている川石氏は、女性にも昇段試験で帯を与えていくことをしています。

さて本題に戻ると、正しい柔道とはなんだということになります。日本の柔道だけでなくフランスの *Le judo* にも歴史や文化があるということがわかんると思います。彼らは「俺たちの柔道、フランスの柔道は日本と同じくらい歴史がある」と胸を張って言う。その通りだと思います。関係者から仄聞したのですが、フランス柔道の秘史がございまして、第二次世界対戦の時パリがドイツに占領されたときにレジスタンスでパリ解放に尽力す

るのですが、そのレジスタンスの中に柔道家たちが結束していたということです。なぜ彼らが活動できたのか？実は占領下にあっても柔道の練習にいくというのは比較的自由に動けたらしいです。なぜならドイツにはドイツ柔術があるくらい、ヒトラーも柔道を容認していました。パリ占領下当時、柔道の練習という名目でどうやらパリ解放にむけて戦略を練って、柔道家のコミュニケーションでこう情報交換をしていたそうです。このようなエピソードを聞くと、柔道は、スポーツ以上のものあるんじゃないかなと思います。だからこそフランスで柔道が受け入れられたんだらうと思います。

次にフランスのスポーツ史から見たいと思いますけども、フランスのスポーツ史というと五輪の父ことクーベルタンです。とはいえスポーツといったらイギリス発祥の地ですから、イギリスの影響が大きいです。とりわけ騎士道精神です。クーベルタンは、古代オリンピックを復活するのではなく、時代に合う新しいものにする。言い換えれば伝統の創造です。すなわちオリンピックのリノベーションです。五輪の刷新をしていくということは、伝統を重視しながらも、新しい民主的なインターナショナルな意味を持ちます。とフランス語で行っています。

1870年ごろ、一気にスポーツがフランスでは注目されるようになりますけども、日本と一緒に、どちらかという国力強化のためのスポーツです。戦争を通じてスポーツで、特に若者は体育で鍛えなければならない。軍隊ですね。愛国心、規律、団結力をたたき込むのには一番いい装置だったんじゃないでしょうか。

スポーツと健康ということでそういったプロパガンダは。運動場は健康促進の場というプロパガンダ運動に使われていきます。フランスのモットーである「自由、平等、博愛」は「労働、家族、祖国」 *Travail, Famille, Patrie* に置き換えられ、スポーツ政策が企てられていきます。ビッシェ政権もスポーツの力を用いたように、フランスの政

策がスポーツによって大きく変わっていきます。戦後は、登山家であるモーリス・エリゾークがド・ゴール政権時代にスポーツ大臣としてスポーツ政策を一気に進めていきます。戦後、「スポーツとは公に奉仕するもの」をモットーにフランス人の自信を取り戻すために、スポーツで若者を鍛えて、若者のヒーローを作り出し、その若者たちが今後のフランス社会をひっぱっていくことを理想に掲げました。スポーツエリートのパラミッド型のシステムというのは、そういった選抜された選手たちを民衆の代表者に仕立て上げていくというシステムを構築させていきます。そしてこのシステムから輩出された人物を登用し先導役にさせていったのです。例えば柔道では、フランスのダビット・ドゥイエ選手。いまやテレビで大活躍の篠原さんに誤審騒動で勝ったフランスのドゥイエ選手は10年前のスポーツ大臣です。日本では現在、馳文部大臣も、プロレスラーで大臣になりました。とはいえ日本ではプロレスラーだった人が大臣になるのは、多少違和感あると思いますが、フランスは全くそういう感じられません。スポーツは、政治の一部であり、政治のビジョンとしてとらえられています。スポーツ代表者が市民代表者になっていく。そして名誉と地位が高まるほど義務を負っていく。責任感重くなって大衆を引っ張っていくような思想がフランスのスポーツのなかにはあります。所謂、ノブレスオブリージュの精神です。だからこそド・ゴール政策のなかでスポーツ政策は重要な位置を占めていきました。とりわけINSEP(国立スポーツ研究所)、すなわちナショナルトレーニングセンターが作られました。当時では革新的だった室内陸上競技場まで作られました。こういったスタジアムなど、いろいろなものを作っていったら、スポーツ人口が一気に増加していきます。そのなかでスターも生まれていきますね。ボクシングのセルダンが代表的です。「愛の讃歌」で当時、人気を博した歌手のエディット・ピアヌの愛人でもありました。「愛の讃歌」はセルダンのための歌だったとも言われます。スポーツ選手と

歌という違和感があるかもしれません。パラミッド型の選抜システムというのは、とにかくエリートを作るという意識がすごく強いです。それはただ強い選手ではなくて社会にどれだけ影響力を及ぼす人を養成するという意味も持つのです。こんなエピソードがありました。北京五輪前であった事件なんですけども、フランスの教え子たちが縁のゆかりもない中国の活動家の解放のために、フランスで有名な雑誌の表紙に活動家の写真をもって解放を訴えるような記事や写真を載せたことがありました。

私はなぜ、自分と関係のない中国人活動家のために行動を起こす必要があるか、競技に集中できなくなるのではないかと怒りました。するとその選手は教え子を叱りました。「ノリコはわかってないよ。オリンピックは差別と相いれないものなのに、中国政府はなぜこういった活動家を虐げるのか」と主張しました。このことは、フランス人選手が単なるスポーツ選手ではなく、フランス社会を代表した一人として五輪の舞台に立っているときちゃんと自覚しているということに気づかされされました。

いいのかわるいのかわかりませんが、このような自覚や認識は、フランス選手に比べると日本選手は、あまり持っていないと思います。国際社会におけるスポーツの場面では、とりわけ国際舞台での発言とか、日本人の発言力が小さいですよ。日本人はフランス選手に比べると存在感が薄い。北京五輪のときもそうでしたけど、ある選手に、海外のメディアが、中国政府の人権問題、ウイグル地区の弾圧行動に対して、としてどう思いますかと聞かれたときに、ほとんどの日本選手は、「私は競技に集中したいので政治のことについての発言はしません」という回答でした。一方で海外メディアにしてみれば、「あなたはオリンピックになりにきたの？メダルだけを取ることを目的に来たの？日本代表選手だけれども、スポーツだけじゃなくて、日本社会の代表という意識を持っていないのか？」と思われてしまいます。国際スポー

ツのなかでは、このように欧州選手を中心にオリンピックが涵養されています。欧州選手の言動を鑑みると隔世の感を覚えます。一方、日本人選手はスポーツに集中できることが許される環境、社会で守られていていいなという感じもします。

さて、まとめです。

現代のフランスとスポーツを結び付けていくと、新しい局面を迎えていると思います。とりわけ多文化共生時代といってもいいと思います。フランスではこの間テロもありましたけれども、移民が非常に多い中です。ちょうど私が 10 年前いたくらいのときは、3 世代目のイスラム系移民が入り始めた時期でした。とはいえ。ナショナルチームの 3 分の 1 くらいが移民の選手でした。ちょうどジダンがワールドカップサッカーで活躍したくらいでした。フランスでは多文化共生社会が進んだ中で、柔道のプレゼンスは瞠目すべき発展を成し遂げています。

フランスで柔道をやっている多くは、供たちです。19 才以下の子供たちが全登録者の 75% 占めるんです。ちなみに日本は、グラフだせばよかったです。日本の柔道人口 15 万人です。フランスは 60 万人です。フランスの人口は 6,500 千万で日本の約半分です。柔道人口で見ればフランスのほうが柔道大国といえます。子どもたちがなぜこんなに多いのかというと、パリのある家庭に行くと子供たちお稽古事をします。女子は乗馬、バレエ。男の子だったらサッカーもしくは柔道ですね。なぜやるのかときくと、柔道は教育的に道徳観を教えてくれるということです。フランスの学校では政教分離といって宗教差別を怖がってしまって道徳観は一切教えないということです。そのなかで柔道の道場の先生は、宗教や人種に関係なく道徳を教えてくれる。日本の柔道では気づけないことです。こういった柔道の道徳を八つのコードモラルといって、フランスでは八つの教えがあります。例えば昇級試験のとき、今日、君はしっかりあいさつできたね、お友達を大事にしたねと言って評価するのです。達成できたときには尊敬、

挨拶、礼節とかをシールであげて柔道パスポートに貼って意識づけしていく。そういった道徳的な教育機関として、フランスでは受け入れられています。それが他のスポーツにはない独自性を出しています。これは面白いですよ。フランスでは政教分離を徹底しているなかで、柔道は宗教を超えた所で受け入れられているのです。学校ではスカーフをとれといって問題になりますけど、道場ではそういったことはならない。私にもイスラム教徒の教え子もいましたけども、例えばラマダンの時期になると試合とあたってしまった場合にはモスクに相談しに行き、時期をずらせるとか柔軟な対応もできるそうなのです。フランスにいて、イスラム教徒の考え方ってすごく変わりましたね。

フランスの多文化共生社会のなかで、私自身、ナショナリズムについての考え方がスポーツを通して変化しました。例えばフランスのワールドカップでジダン選手ら移民 2 世たちが活躍したことで、フランスの国籍に対する価値観が変わりました。例えばこの写真は、フランスの柔道チームのオリンピックのあとの打ち上げなんですけども、一人はみんな世界チャンピオンなんですけど、エマン選手はカメルーン出身のフランス国籍、真ん中はイラン出身です。さらに横の選手はグアドループというフランスの植民地出身です。彼らは全員フランス国籍。私はフランス国籍ではないですがフランスチームのコーチでした。現場にいとフランスチームとは「想像の共同体」であるということを感じました。ラグビーの日本チームも想像の共同体ですよ。ある意味。スポーツではナショナリズムの捉え方が変化しています。とりわけ 20 世紀前半から民族意識オーストラリアのシドニーオリンピックからその辺も変わって来たしワールドカップもそうです。

例えばラグビーワールドカップにおける日本チームの活躍です。インターナショナルになってきた。日本人じゃなくても日本チームとして活躍できる。国籍、人種、宗教が違って日本チームなんだということですね。しかも五郎丸選手がツ

イッターで「ラグビー選手が注目されている今だからこそ日本代表にいる外国人選にスポットを。と彼らは母国よりも日本を選び日本のために戦っていると。最高の仲間だ。国籍はちがうが日本を背負っている。これがラグビーだ」ということを言ってすごく共感しました。ラグビーの国籍の資格というと、もちろん、日本の国籍を有していることもあるんですけども、それ以外に両親とか祖父母がその国籍があること。三つめは、3年以上その国に継続して居住している。これで日本チームの一員になれるのです。

とはいえでも、多文化社会が受け入れられてきて、例えばジダンとかもそうですけども、国籍や人種がちがう中で同じチームを作ることは難しい。欧州、とりわけフランスでも軋轢のなかでテロの多発するようになりました。現在、国家・民族・宗教間が世界的にもうまくいっていないです。西洋近代におけるグローバル資本主義、文明の拡大が広がるにつれて、西洋的な価値が支配されることで文化や宗教が摩擦を起こしているから、テロが起きたり、シャルリエブドが襲撃されたりしているのではないのでしょうか。

こんな世の中だからこそ西洋文化のなかで中庸をえてきたオリエンタル文化である、柔道の出番ではないかと思います。

そもそもスポーツは、暴力だったものを非暴力化したものです。それは文明の証拠でもある。フランスでも貧困問題があって、昔はちょっと素行の悪い子たちにも柔道を教えられたけど、現在は格差社会がさらにひどくなって貧困層の子たちが柔道クラブにも通えない。むしろ貧困層の子供たちにスポーツをできる環境を無償で与えるべきだと思います。スポーツは青少年の育成という公共性を持ちます。

また柔道は二面性を持っている。これまで話したようにナショナリズムの部分であったりインターナショナルであったりも持っています。そういうようなところがあるように、二面性っていうのはすごくこの時代必要なんじゃないかと思います。

ヨーロッパの近代社会の中でうまく利用したのが柔道ではないかなと思います。ヨーロッパ社会のなかに柔道が及ぼしてきたエピソードを長く話してきましたけども、国際化とともに文化やナショナリティ、エスニシティが摩擦したりするなかでスポーツの役割はすごく大きいと思います。もちろんスポーツだけじゃなく音楽とか文化とかも、拮抗する社会の仲介役になるような装置というかシステムというかそういったものが欧州社会に求められているのではないかなと思っている次第です。